

月例研究会（2022年10月19日）

## 山間地域の部落婦人会

——兵庫県宍粟郡一宮町  
閩賀部落婦人会の事例

長谷川 達朗

山間地域では、戦前・戦後を通して多就業型の世帯経営が多く、既婚女性の労働負担が大きかったことが指摘されている。本報告で扱う兵庫県宍粟郡でも、男性と未婚女性の出稼ぎが多く、共通した傾向を持つ。本報告では、そのような特徴を有する山間地域において、女性と部落婦人会が村落運営のなかでどのような役割を担ったのかを明らかにした。

閩賀婦人会は、1923年に組織され、部落に一戸を構える家の既婚女性は全員会員となった。1928年に部落の山林の一部を購入し、「婦人会山」と呼ばれる共有林を創設した。婦人会山の管理は会員によって行われ、下刈や植込みの際には会員が一斉に出役して実施した。そのようにして管理された樹木は、下草や薪炭材として売却され、婦人会財政に寄与した。また、同年に部落内の情報伝達を請け負う仕事（歩行（あるき））を婦人会の事業とし、それにより米・麦や現金の収入を得ていた。この頃閩賀婦人会は、村落運営における役割を明確化し、婦人会山や歩行等の事業から生み出した収益を部落の社会資本整備や戦争協力に還元していた。

婦人会による戦争協力は、都市や農村とも共通した傾向だといえよう。他方で、婦人会が山林を所有・管理し、村落運営を経済的に支えていた点は、山間地域の特徴であったと考えられる。男性と若年女性の不在は、既婚女性による村落運営への参加を要請したのである。

戦後の宍粟郡では、人口流出と第二種兼業農家化が進み、特に女性の雇用労働者化がみられた。こうしたなかで、婦人会の役割も変化していたことを確認した。

第一に、戦後の婦人会は生活改善に関する講習会などを積極的に実施し、会員は調理や裁縫、衛生などに関する講習を受けていた。婦人会員は、自発性を持ちながらも、家庭を支える存在として啓蒙された側面が大きかったと考えられる。また、部落では老人会や子供会の行事が増加し、婦人会はそれらの行事に奉仕していた。村落運営のなかで老人や子供に奉仕する役割が婦人会に課された点は、戦前と異なる。

第二に、1950年代以降の婦人会山では下草や薪炭材の収益が減少し、杉や桧を植林するようになった。共有林利用のあり方が、生活資源の採取地から造林経営に変化したといえる。婦人会山の立木は約10年ごとに伐採・売却された。収益は、婦人会員に平等に分配されるか（家計補助）、部落の社会資本整備に充てられるなどした。戦前と比べて山林資源の利用方法は変化したが、婦人会山を通して婦人会は村落運営への経済的な関与を継続していた。

ただし、第三に、婦人会山で植込み等を実施する際、不足人夫賃を支払うことで、出役を代替する者が出現していた。この背景には、高度成長期に女性の雇用労働者化が進んだ影響が存在する。家業と工場勤務の双方を務めた女性の労働負担は増加し、婦人会山の出役を務めることが困難になっていたのである。山間地域における多就業世帯の多さと女性の労働負担は、形を変えながら継続していたことを指摘しておきたい。

（はせがわ・たつろう 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程／法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）